

國學院大學學術情報リポジトリ

「神道」はどう翻訳されているか：
神道と日本文化の国学的研究発信の拠点形成：
21世紀COEプログラム

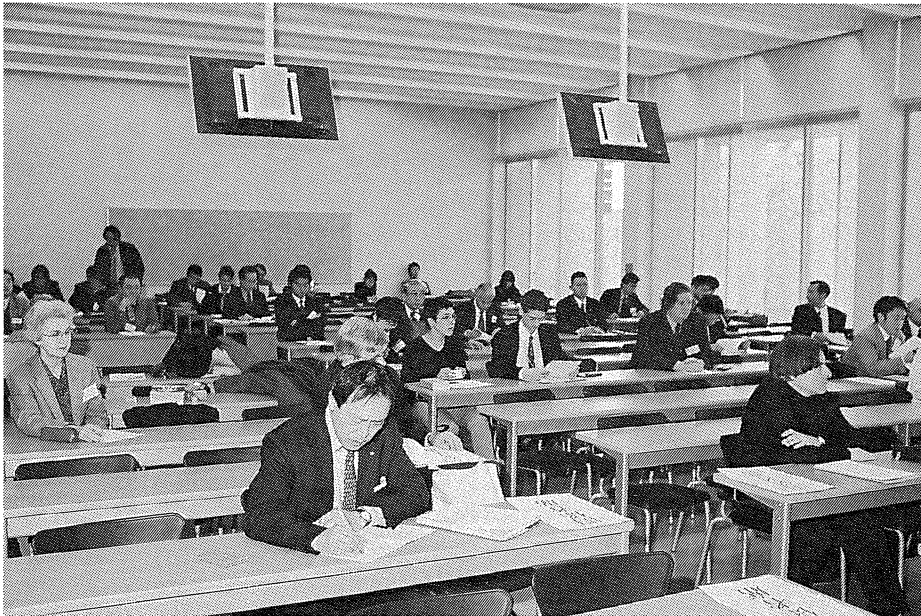
メタデータ	言語: Japanese 出版者: 國學院大學21世紀COEプログラム 公開日: 2024-06-22 キーワード (Ja): 170.4, 神道 シントウ キーワード (En): 作成者: 井上, 順孝, ウエイマイヤー, アン, マクナリー, マーク, ベンテリー, ジョン・R, マセ, フランソワ, 魯, 成煥, ハーディカ, ヘレン, プロール, インケン, ベルトン, ジャン=ピエール, 櫻井, 治男, ロコバント, エルンスト, 國學院大學21世紀COEプログラム メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002000502

第II部

ミニ国際シンポジウム

〈神道〉はどう翻訳されているか (2)

近現代の神道を中心に



開会の挨拶

井上順孝（実行委員長）

國學院大學 21 世紀 COE プログラムと、神道宗教学会の共催によりますミニ国際シンポジウムを開催いたしたいと思います。最初に本日の司会を務めます私から、簡単にこのシンポジウムの趣旨を説明させていただきます。その後でインケン・プロール (Inken Prohl) さんに最初の発題をお願いすると、そのようにいたしたいと思います。

本日のプログラムのスケジュールは、ここに書いてありますので、おおよそ、この通りにやりたいと思います。最後のほうでは皆さんの議論への参加も大いに期待しておりますので、よろしくお願いいたします。

ミニ国際シンポジウムと銘打ちましたけれども、これは本年 9 月に行われました国際シンポジウムを補完する意味で開かれます。9 月には「神道はどう翻訳されているか」ということで 5 人のパネリストをお招きして、シンポジウムを行いました。そのときには「神道古典の部」それから「国学の部」ということで、神道の古典の翻訳をめぐる問題、それから国学者の著作に関する問題を取り上げました。非常に面白い議論になりまして、ミクロ・マクロ双方の視点から色々な意見が出ました。日本人の研究者にとっても大変有意義なシンポジウムであったと私は考えております。ただ、そのときは「神道古典」それから「国学」ということが中心になりましたもので、近代、現代の神道の文献あるいは言説と申しますか、使われている言葉をめぐるといえるものが扱えなかったということがあります。それから、どうしても翻訳となりますと、これは英語圏が中心になります。事実、前回は 5 人のうち 3 人は英語圏からのパネリストであったわけです。これは仕方のないことだと思います。

しかし、神道に関する文献は、いろいろな国で訳されております。韓国でも古事記を訳している、というようなことがあって、私たちとしても非常に新鮮な思いで前回は聞きました。今回はフランスとドイツという英語圏に次いで研究の盛んな地域と言える国の研究者をお招きして、是非前回扱えなかった近現代の問題を扱いたいということになりました。近現代を扱うということになりますと、当然近代神祇制度の問題、それから、いわゆる国家神道の問題というものも入りますし、さらには、近代には教派神道、神道系新宗教と、というようなものも出現しておるわけです。古代や、近世とはまた違った問題も起こってきます。

いったい神道系新宗教が、神道というものの中に入るかどうかということは、人によって考え方も違うかと思っています。私は宗教学あるいは宗教社会学という立場ですので、それらを含めるということが神道研究にとっては重要である、という立場をとっております。

話は少しずれますけれども、仏教研究において、近代のいわゆる仏教系の新宗教は、あまり扱われないという傾向があります。しかしながら我々の目からすると、日本の仏教、近現代の仏教を扱おうと思ったら、やはり仏教系の新宗教の活動や、そこでのいろんな言説、儀礼といったものを対象に含めないと、近代の特徴が見えてこないだろう、とそういう気がしております。

そういうことを考えるならば、やはり神道に於いても、神社研究、あるいは、いわゆるフォークロアのレベルの神道、というだけではなくて、さまざまな教団組織を形成して活動している神道系の教団も視野に入れた方が、いいのではないかと。とくに、近代というのは神道に一体どのようなエレメントをもたらしたのかということを考える上では、興味深い視点を提起することになるかと思います。

神道系教団においても、当然のことながらそれまでの神社神道で使われてきた、いろんな概念、用語を用いるわけです。神社で言われる「神」と神道系教団で言われる「神」、そこには「ずれ」が有るのか無いのか。まあそういうことも当然神道研究の中では大きなテーマになる訳であります。そういうこともありまして、今回はお呼びしたパネリストの方のうち、発題者のお二人は、どちらかといえば神道系の新宗教の方を主に研究されている方です。それからコメンテーターをお願いしたロコバントさん (Lokowandt) は、国家神道の問題なども研究された方です。そして櫻井さんは近代の神社史を研究されており、とくにいわゆる民俗信仰、フォークロアのレベルでの神社への信仰という問題も視野に入れておられる。そういう意味では近代に起こった神道的な現象のいくつかを対象としておられる方々です。そうした方々に実際に、翻訳という作業を通じて起こってくる問題を提起していただくということに進めたいと思います。

近現代の神道を論ずる視点はいっぱいある訳ですが、この企画、前回もそうでしたけれども、翻訳する、つまり日本以外の言葉に訳するときに、どういう問題が起こってくるかという視点は、我々にとっても非常に刺激的です。日本語だけで考えているときには起こらない問題というのがいっぱい起こってくる。逆にそのことが今後の神道研究をどのように進めていったら良いのかと、こだまのように返って来る問題なんです。そういう意味では、今日は話がどう展開するのか私はあまり予測はつきません。けれども、大事なのはそこでどんな問題が起こってくるのか、そこで今後検討すべき課題をキッチリと見定めて、我々の研究のテーマに据えていくと、そういう姿勢が大事だろうと思います。

従いまして皆さんにも是非後半の方では議論に積極的に参加戴きまして、的確に問題を探り当てる、そういうことができればこのシンポジウムの目的は達せられるかと思います。